

武蔵野日曜集会

ナルドの香油

――ヨハネ伝第11章47～12章11節――

1984年10月14日(武蔵野)

小池辰雄

イエスを殺さんと議れり^{はか} ベタニヤのマリヤ ベタニヤの或る女 罪ある一人の女 霊界の大革新者 深い東洋的なもの ゼロ＝無限大 香油即我

【ヨハネ11・47～12・11】

47ここに祭司長・パリサイ人ら議會を開きて言う『われら如何に為すべきか、此の人おおくの徴を行ふなり。48もし彼をこのまま捨ておけば、人々みな彼を信ぜん、而して 로마人きたりて、我らの土地と國人とを奪わん』49その中の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言う『なんじら何を知らず。50ひとりの人、民のために死にて、國人すべての滅びぬは、汝らの益なるを思わぬなり』51これは己より云えるに非ず、この年の大祭司なれば、イエスの國人のため、52又ただに國人の為のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん為に死に給うことを預言したるなり。53彼等この日よりイエスを殺さんと議れり。

54されば此の後イエス^{あらわ}蹟にユダヤ人のなかを歩み給わず、此処を去りて荒野にちかき処なるエフライムという町に往き、弟子たちと偕に其処に留りたもう。55ユダヤ人の過越の祭近づきたれば、多くの人々身を潔めんとて、祭のまえに田舎よりエルサレムに上れり。56彼らイエスをたずね、宮に立ちて互に言う『なんじら如何に思うか、彼は祭に來らぬか』57祭司長・パリサイ人らは、イエスを捕えんとて、その在処^{ありか}を知る者あらば、告げ出づべく預て命令したりしなり。

1過越の祭の六日前に、イエス、ベタニヤに來り給う、ここは死人の中より甦えらせ給いしラザロの居る処なり。2此処にてイエスのために饗宴^{ふるまい}を設け、マルタは事え、ラザロはイエスと共に席に著ける者の中にあり。3マリヤは価高き混りなきナルドの香油^{いたごあはれ}一斤を持ち來りて、イエスの御足にぬり、己が頭髮^{かみのけ}にて御足を拭いしに、香油のかおり家に満ちたり。4御弟子の一人にてイエスを売らんとするイスカリオテのユダ言う、5『何ぞこの香油を三百デナリに売りて貧しき者に施さざる』6かく云えるは貧しき者を思う故にあらず、お



のれ盗人にして財囊^{かねいれ}を預り、その中に納むる物を掠^{かす}めいたればなり。⁷ イエス言い給う『この女の為に任せよ、我が葬りの日のために之を貯^{たくわ}えたるなり。⁸ 貧しき者は常に汝らと偕に居れども、私は常に居らぬなり』⁹ ユダヤの多くの民ども、イエスの此処に居給うことを知りて来る、これはイエスの為のみにあらず、死人の中より甦えらせ給いしラザロを見んとてなり。¹⁰ 斯て祭司長ら、ラザロをも殺さんと議る。¹¹ 彼のために多くのユダヤ人さり往きてイエスを信ぜし故なり。

● イエスを殺さんと議^{はか}れり

ラザロの復活という驚くべきことがこのキリストの御霊の力で行われたわけですが、民衆の心がみんなキリストに寄るものだから、パリサイはすぐこういうことをまた妬むわけです。何とかしてキリストを片付けてしまわなくてはいかん、ということになる。

⁴⁷ ここに祭司長・パリサイ人ら議會を開きて言う『われら如何に為すべきか、此の人おおくの徴を行ふなり。』

サンヘドリングという議會です。「われら如何に為すべきか」という言葉は時々出てくる言葉ですが、我々クリスチャンの在り方も、「われら如何に為すべきか」と。ヒルティが『眠られぬ夜のために』にも書いてますが。まあこの場合は、「どうしたらいいか」ということ。

⁴⁸ もし彼をこのまま捨ておけば、人々みな彼を信ぜん、而してローマ人きたりて、

我らの土地と国人とを奪わん』

まさにその通りです。自分たちの政權が弱くなってしまうという。

⁴⁹ その中の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言う

「此の年の」というのは、「此の年から」ということ。

『なんじら何をも知らず。⁵⁰ ひとりの人、民のために死にて、国人すべての滅

びぬは、汝らの益なるを思わぬなり』

ということとは、「キリストを殺せば、みんなが助かる」ということなんです。そういう悪巧みの言葉が逆に、キリストへの預言みたいな言葉になってしまうわけです。「すべての滅びぬ」なんていうのは、別な意味では、キリストに救われることです。もちろん、大祭司の言う言葉は全然別の意味ですけれども。おもしろいですね、こういうことは。私は道を歩いていて時々行き交う人の言葉がちよつと耳に入ることがある。そうすると、その言葉がえらくあるひとつの靈感みたいに関することがある。ときたまそんな経験を覚えてますが。これなんか全く逆説的な預言になってしまうわけです。

⁵¹ これは己より云えるに非ず、この年の大祭司なれば、イエスの国人のため、

⁵² 又ただに国人の為のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん為に死に給うことを預言したるなり。⁵³ 彼等この日よりイエスを殺さんと議^{はか}れり。



ラザロの復活がきっかけになってしまった。ラザロの復活どころじゃない。キリストの復活はラザロの復活以上のものであることを、キリストはラザロの復活をもつて、そういった業をもつて預言されているようなわけです。

⁵⁴されば此の後イエスあろ蹟にユダヤ人のなかを歩み給わず、うつかりすると、つまらない死に方をされては困りますからね、キリストには大事な死に方がある。それは十字架の贖罪の死ですから。

此処を去りて荒野にちかき処なるエフライムという町に往き、弟子たちと偕に其処に留りたもう。

「エフライム」はまた「イスラエル」の別名でもあります。

⁵⁵ユダヤ人の過越の祭近づきたれば、多くの人々身を潔めんとて、これは祭司宗教ですから。

祭のまえに田舎よりエルサレムに上れり。⁵⁶彼らイエスをたずね、宮に立ちて互に言う『なんじら如何に思ふか、彼は祭に来らぬか』
非常にキリストに注目して、ずっと民衆との行動を見ているわけです。

⁵⁷祭司長・パリサイ人らは、イエスを捕えんとて、その在処あつこを知る者あらば、告げ出づべく預かねて命令したりしなり。

そこはそれでいいです。

●ベタニヤのマリヤ

今度は12章に入ります。いよいよ、12章から19章43節まで受難週間です。

¹過越の祭の六日前に、イエス、ベタニヤに來り給う、ここは死人の中より甦えらせ給いしラザロの居る処なり。

ベタニヤは非常にキリストの懐かしい所ですね。

²此処にてイエスのために饗宴ふるまいを設け、マルタは事つかえ、マルタは例によつて一生懸命でやっているわけだ。非常にもてなしをよくやる女性です。

ラザロはイエスと共に席に著ける者の中にあり。

ちゃんと復活したラザロがそこに居るわけです。

³マリヤは価高き混りなきナルドの香油いばいあん一斤を持ち來りて、

「ナルドの香油」のことは、著作集の第一巻に私は詳しく書いてありますから、あれを読んでください。

イエスの御足にぬり、己が頭髮かみのけにて御足を拭いしに、香油のかおり家に満ちたり。⁴御弟子の一人にてイエスを売らんとするイスカリオテのユダ言う、⁵『何ぞこの香油を三百デナリに売りて貧しき者に施さざる』⁶かく云えるは貧しき者を思う故にあらず、おのれ盗人にして財囊かねいれを預り、その中に納むる物を掠かす



めいたればなり。⁷ イエス言い給う『この女の為すに任せよ、我が葬りの日のために之を貯^{たくわ}えたるなり。⁸ 貧しき者は常に汝らと偕に居れども、私は常に居らぬなり』⁹ ユダヤの多くの民ども、イエスの此処に居給うことを知りて来る、これはイエスの為のみにあらず、死人の中より甦えらせ給いしラザロを見んとてなり。¹⁰ 斯て祭司長ら、ラザロをも殺さんと議^{はか}る。¹¹ 彼のために多くのユダヤ人さり往きてイエスを信ぜし故なり。

●ベタニヤの或る女

「ナルドの香油」のこの話は非常に有名な話で、まあ種類がちがうんでしようけれども、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネに全部に出ている。マルコ伝は14章1節から9節。マタイ伝は26章6節から13節。ルカ伝は7章36節から50節。ヨハネ伝は12章1節から8節です。『共観福音書』という書を見ると、ちゃんと並んで書いてあるので非常に便利です。ちよつとご参考に読んでおきましょう。

マルコ伝14章1～9節。

「さて過越と除酵祭との祭の二日前となりぬ。祭司長・学者ら詭計^{たばかり}をもてイエスを捕え、かつ殺さんと企てて言う、² 『祭の間は為すべからず、恐らくは民の乱あるべし』³ イエス、ベタニヤに在^{いま}して、癩病人シモンの家にて

今度はちがうですよ、ベタニヤはベタニヤなんだけれども、癩病人シモンの家にて、

食事の席につき居給うとき、

「或る女」と書いてある。

或女、^{あるおんな}価高き混^{まじり}なきナルドの香油^{にわあぶら}の入りたる石膏の壺を持ち来り、その壺を毀^{こぼ}ちてイエスの首^{こゝべ}に注^つぎたり。

こつちの方は「首に」です。み足ではない。

⁴ ある人々、憤^いりて互に言う『なに故かく濫^{みだり}に油を費すか、⁵ この油を三百デナリ余に売^うりて、貧しき者に施^くすことを得たりしものを』

こういう言葉は同じです。

而して甚^{いた}く女を咎^{とが}む。⁶ イエス言い給う『その為すに任せよ、何ぞこの女を悩すか、我に善き事をなせるなり。⁷ 貧しき者は、常に汝らと偕におれば、何時にても心のままに助け得べし、然れど我は常に汝らと偕におらず。

ここらも同じような言葉ですね。

⁸ 此の女は、なし得る限りをなして、我が体に香油をそそぎ、預^{あらか}じめ葬りの備^{そなえ}をなせり。⁹ 誠に汝らに告ぐ、

この言葉は新しいですね。

全世界、何処にても、福音の宣伝えらるる処には、この女の為しし事も記念



として語らるべし』(マルコ14・1～9)

これがマルコ伝です。

マタイ伝は26章6節から13節。

「6イエス、ベタニヤにて癩病人シモンの家に居給う時、

これはマルコ伝と同じです。だから、マルコ伝とマタイ伝は非常に似ている。

7ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油いと高き香油を持ちて、近づき来り食事の席に就き居給うイエスの首しんに注げり。

これも首に油を注いだ。あと出てくる言葉もみんなマルコ伝と非常に似ている。マルコ伝とマタイ伝は非常に似ています。これは同じ記事とみていいでしょうね。

8弟子たち之を見て憤り言う『何故かく濫みだりなる費ついでを為すか。9之を多くの金に売りて、貧しき者に施すことを得たりしものを』10イエス之を知りて言いたもう『何ぞこの女を悩すか、我に善き事をなせるなり。11貧しき者は常に汝らと偕におれど、我は常に偕に居らず。この女の我が体に香油を注ぎしは、わが葬りの備そなえをなせるなり。12誠に汝らに告ぐ、全世界、何処にてもこの福音の宣伝えらるる処には、この女のなしし事も、記念として語らるべし』(マタイ26・6～13)

●罪ある一人の女

あとはルカ伝。ルカ伝は7章36節から50節。

「36ここに或るパリサイ人ともに食せん事をイエスに請こいたれば、パリサイ人の家に入りて席につき給う。

今度は、パリサイ人の家です。

37視よ、この町に罪ある一人の女あり。

今度は、「罪ある一人の女」とある。マグダラのマリヤか何かわからない。

イエスのパリサイ人の家にて食事の席にい給うを知り、香油たみの入いれりたる石膏の壺を持ちきたり、38泣きつつ御足み近く後ろにたち、

こつちの方は「御足」だ。こここのところはヨハネ伝に似ている。ただし、場所がちよつと違う。

涙にて御足をうるおし、頭の髪けにて之を拭ぬぐい、また御足に接吻くちづけして香油を抹ぬれり。39イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言う『この人もし預言者ならば触る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人つみびとなるに』40イエス答えて言い給う『シモン、我なんじに言うことあり』シモン言う「師よ、言いたまえ」

譬話が出てくる。だいぶ、ルカ伝のはまた趣がちがう。この女性がいかに罪を赦されて、



自分を愛しているかということはずっと長く50節まで書いてある。

41『或る債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、⁴² 償いかたなければ、債主この二人を免せり。されば二人のうち債主を愛することいずれか多き』⁴³ シモン答えて言う『われ思うに、多く免されたる者ならん』イエス言い給う『なんじの判断は当れり』⁴⁴ 斯て女の方に振向きてシモンに言い給う『この女を見るか。我なんじの家に入りしに、なんじは我に足の水を与えず、此の女は涙にて我が足を濡らし、頭髮にて拭えり。⁴⁵ なんじは我に接吻せず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず。⁴⁶ なんじは我が頭に油を抹らず、此の女は我が足に香油を抹れり。⁴⁷ この故に我なんじに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり。赦さるる事の少なき者は、その愛する事もまた少なし』⁴⁸ 遂に女に言い給う『なんじの罪は赦されたり』⁴⁹ 同席の者ども心の内に『罪をも赦す此の人は誰なるか』と言い出づ。⁵⁰ ここにイエス女に言い給う『なんじの信仰、なんじを救えり、安らかに往け』(ルカ7・36～50)

だから、こういう香油を塗るということは、ある一人の女性に限ったことではなかったと思われます。ヨハネ伝でははつきりとラザロの姉妹マリヤがやったということになっている。

●霊界の大革新者

私の書いた『ナルドの香油』のあるところをちよつと読みます。

「マルコ福音書第一四章の背景は、イエスがエルサレムに入城して第四日目、ニサンの月(今でいうと三、四月の頃)の二三日という時。ニサンの月の二〇日というのが、マルコ第二章から始まっている。即ち、受難週間といわれる時期で、キリストが十字架に向つて、進みつつあるときである。

過越の祭というのは、ニサンの一四日に始まり、午前に、パン種を除いたものを作り、午後には、羊を屠る。日が暮れて即ちユダヤでは日没から日没が一日だから十五日の始から一二時間の間に過越の食をとる。これが「過越の祭」である。それから二日まで七日半という期間、除酵祭が続く。であるからその間に、イエスは十字架にかけられたわけだが、祭司長・学者・長老たちがなんとかして、この新興宗教のイエスを、この民衆のデマゴグ(煽動者)を、片づける折もがなとねらっていたわけである。ユダヤ教の正統派がイエスを異端とし、イエスは彼らの「言い逆らいを受ける徴」であった。

今でも正統信仰と自任する人たちが、ややもすると、本当は聖書の根源現実を最もよく把握している人たちを排撃し、白眼視し、除け者にしようとする。いつの世にも、



預言者はその時代に容れられない。故里に貴まれない、というわけだが、教会史を繙いても、先覚者、改革者たちは、殆どみな誤解されたり、認識されずに迫害を受けた。

イエスは最大の宗教改革者、人間革命者であった。全世界の歴史を二分した精神界の革命家である。「紀元」といわれるのは、正にこのキリストという霊界の大革新者に基づいたわけのものである。ところがその当時において、イエスは大異端者で、磔殺たくさつの刑に処せられた。」(小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』250頁「ナルドの香油」)

云々というようなことをずつと書いてありますから、またお読みになってください。

ナルドの香油というのはインド産の香油です。ナルダーとかいう植物の名前です。非常に高価なもので、この三百デナリというのは今でいうと20、30万円になるでしょうね。ルカ伝の場合は、石膏の壺の中に詰めてあるを、壺を破わつて首かしらから注いだという。非常にルカ伝の方は気持を一番具体的に表しているわけですが、私にはやはり、ある一人の女性とは思わない。二人、あるいは三人、同じようなことをしたのではないか。まあ大体、二人かと思いますが。マグダラのマリヤとこのラザロの姉妹のマリヤ。「ある女」とか「罪ある女」というのはマグダラのマリヤの方だ。

●深い東洋的なもの

キリストという方は非常に霊的な人格で、もしこれを香りというならば、正に当時の最高の香りを持ったところのナルドの香油の香りをもって、そういったキリストの霊的人格が象徴されるということも言えるのではないかと思う。この場合は、最も素晴らしい香油がイスラエルのオリーブの油ではない。これがおもしろい。ユダヤ人はオリーブの油を非常に洗礼に使うわけでしょう。「油注がれたる者」という。だから、本当はオリーブでもいいわけだ。しかし、オリーブはありふれている。むしろ、異邦のインドの香油が注がれたというところに非常に私は新しく関心を覚えるわけです。即ち、異邦的な、いわゆる正統派ではない人たちが逆にキリストについて行く。一番正統のユダヤ人たちが今でもキリストを拒んでいる。ナルドの香油が注がれたということには、キリストの救いがいかに世界的なものであるかということの象徴にもなると思われます。

西洋的なものの考え方、またユダヤ的なものの考え方、それをも乗り越えて、むしろ本質でいうと、福音の性格には深い東洋的なものがある。それと非常に共通するものはやはりヨハネなんです。ヨハネ伝が一番素晴らしく霊的な高度な福音書であると言える。いかにこのヨハネ福音書が、むしろ東洋的な色彩のあるものが、実は一番こうだということになりますと、福音を本当につかめるのはむしろ東洋人である。そういう意味において我々が、ヨーロッパのいわゆる「正・反・合」というような弁証法的なものの考え方ではなくして、「一即全」、あるいは「無即全」という、そういったような角度のつかみ方が実は一番福音に近いんだと、いや実にキリストはそういう人だったと、そういうことを思う。



私はゲエテをよく読んでいますが、ゲエテという人が非常にやはり東洋的な考え方を――彼は東洋のことをそう知っているわけではないけれども――本来持っている。超ドイッ的なものが実は世界的なものを持つていたという意味において、我々は大いに福音をつかむ意味において自信ならざる自信を持つていいと思う。

パウロもあれだけ素晴らしいユダヤ的な考えの人がやはり最後はユダヤを突き抜けています。やはり、そうなってくると、仏教的なものの考え方、つかみ方というものが非常に大事なんです。それだけとは言いませんよ、もちろん。それとそれからキリストの持つているユダヤ本来の、ユダヤ的にしてまたユダヤを突き抜けたところのものと、こういったものがいかに福音の一番本質を表しているのではないかと、本質ではないかと、そういうことをつくづく思います。

どうぞ、そういう意味で、あなた方はいわゆるヨーロッパ神学に別にそんなに傾倒しないで、むしろ東洋的でいい。東洋的といいますが、やはり一番中心の大事なことがこの聖霊のことなんです。聖霊のことになると――仏教も霊の世界は素晴らしいですよ、けれども――キリストの持つていた霊的生命、聖霊、これは何といっても最高のものだと思う。だから、聖霊をもつてものを見ていくと、あるいはものをつかんでいくと、西の方の善さも東の善さも全部これをひっくるめて渾然としてつかむことができるのは、正にキリストの霊なんです。

キリストの霊は全くユニークである。我々が御霊のことを何故にこうやって強調しなくてはならないかということとはそういうところにあります。トルストイの『復活』を読んでも、やはりトルストイももうひとつ足りない。この聖霊の世界が足りない。ですから、我々はキリストの御霊の光、知恵を持つと、何でも本当の意味でつかめてくる。深く祈ってください。祈り入ることです。そうしたら、皆さんは何をなさつていても、その道において凄いいことになっていきますから。

このナルドの香油が東洋の香油で世界的なもので、これがむしろユダヤの香油でなかったというところに非常に新しく興味を感じた。

●ゼロ＝無限大

それがラザロの姉妹のマリヤであろうと、マグダラのマリヤであろうと、自分の心を全部、香油にしてしまっているわけです。香油を注ぐことと、自分の全身を注ぎ出すことが一つになっている。そういうキリストに対する葬りの備えをした。だから、キリストはそれを非常に喜ばれて、

「全世界、何処にてもこの福音の宣伝えらるる処には、この女のなしし事も、

記念として語らるべし」

と言われたのは、そういった全的な――それが本当の献身、身を献げるといって、献身的と



いうのはそういう意味です——献身的な在り方ということ。自分の身を献げるというので
すから、自分の身は無くなる。献身的というのと、無者的というのは同じことです。いつ
も書いているとおり、

「ゼロ＝無限大」(0＝∞)

なんです。これは本当に力がぎますよ。自分を投げ込んでしまつて、もう我もなく世もな
くという。これは本当にそうなんです。

「我もなく世もなく、ただ主のみませり」

という。あの讃美歌はいいと思う。「我もなく世もなく、ただ主のみ」という。「主と一如」
と言いましても、こちらに我があるような意識はなくなってしまう。ただ「主のみ」とい
うこと。

「生くるも死ぬるもキリストのみ」

とパウロが言っているのは、パウロはあれだけのややっこしい人間だけれども、最後は本
当に一如の世界にパウロも入っている。だから、凄いんですよ、パウロというやつは。あ
のもの凄いエネルギーというのはキリストのエネルギーそのものが展開しているわけです。

●香油即我

昨日、私はテレビで不思議なものを見ていた。なるほど、随分これは凄いなあと。あの
真似はできない。驚いたね。一番から五十番までいろんな名前が出てくる。いろんな名詞
だとか、ちよつと短い文句だとかを聞いたあと、「何番は何」と全部当ててしまう。その記
憶力はもの凄い。何でも身を投じた訓練というものはもの凄いものだということを昨日、
感じた。しかし、その訓練も、御霊の力がきたらもの凄い訓練になると思つて、いよいよ
聖霊の貴さを感じた。だから、不可能はなくなるよ。抜き身の刀で切りつけられても、身
体が切れないんだからね。身体が鉄みたいになつてしまう。鋼鉄人とか何とか言っていた。
普通の空手でやってきたつて、あの人だったら、空手の手の方が折れてしまうでしょう。まあ
おそれいった。いろんな不思議なものをやっていました。全部、それは超人的な訓練に
よるらしい。

私たちは何をしていても、本当にそれに打ち込んでわき目もふらずということがいかに
大事であるか。

「精神一到、何事か成らざらん」

と、私はよく母から聞いていましたけれども。まあ私みたいな遅まきみたいなものはしよ
うがないけれども、どうぞ、皆さん、若い人は——もうそうなつたら、精神的に肉体的に
どうのこうのなんてことは問題じゃないから——ぜひ、そうやって進んでください。野球
だつて、その気合でやったら凄いことになる。ただ技術ばかりやって、巧みなことばかり
やつたつてダメなんだ。あとは、集中した精神力です——精神力とはあまり言いたくない



けれども――私に言わせれば、聖霊、力なんです。これは聖霊の焦点です。これは燃えるんです。ナルドの香油の香りは世界一だが、あなた方自身がナルドの香油のような香り高き人になる。

私はそういうものを見ながら、もう聖霊の世界に入ってしまったんだよ、ああ凄いなあと
思つてね。私みたいな見方をするやつはちよつといないでしょうけれども。どうぞ、皆さん、
もの凄く展開してください。自分なんてものは、見限つてはいかんですよ。ゼロにしてい
けばいい。ゼロになる。いつも言っているとおり、十字架がゼロにしてくださいだ。そ
うすると、円現する。

我々の在り方そのものがナルドの香油になる。キリストは喜ばれる。

「お前の在り方はナルドの香油の如しだ」

と。天界に香りが上る。自分自身が香りにならなければしょうがない。

キリストは富める青年に、

「お前は、持てるものを全部、貧しき者に施せ」

と言われた。ということとは、

「自分を全部、人にやれ」

ということでしょう。ここのもとも本当は同じことだ。この女性は、香油即我、我即香油
となつて、キリストに献げているわけです。要するに、すべての在り方が全的であつて、
その瞬間に打ち込む。

これはダンテでもゲーテでも、とにかく本当に生きた人は、親鸞であろうと良寛であろ
うと、みんなそうです。日蓮であろうと。だから、いわゆる信仰なんて言っている世界で
はないぞと。もう勝負ありですよ、皆さんは。召団の人たちはそのような一人びとりであつ
てください。何がどうなつたつていい。必ず勝つていきます。運命環境をとにかく言う必
要はひとつありません。これがもうキリストにおける絶対次元の世界です。おわります。

